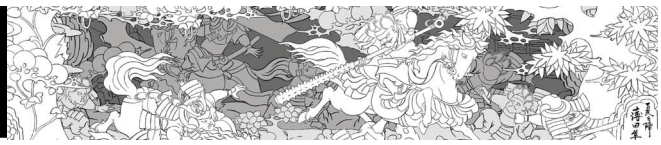
宮本地車噺



第 19 回「筑後川之合戦」

今月のお話は太平記「筑後川之合戦」です。地車彫刻としては珍しい題材です。さらに九州での出来事ですので皆さんにはあまり馴染みがないことだと思われます。このお話を読んで頂き宮本地車の左側の土呂幕を知っていただければ幸いです。

太平記は南北朝時代を舞台にした軍記物語です。南北朝時代とは皇室が皇位継承をめぐって争い、１３３６年に後醍醐天皇が吉野に転居し朝廷が分裂してから１３９２年に皇室が一つにまとまるまでの間を指します。

１３３３年、後醍醐天皇の命により足利尊氏、新田義貞ら全国の武士達が鎌倉幕府倒幕をなしとげ建武の新政が始まりました。しかしながら恩賞の不公平など不満を抱えた武士達が足利尊氏に従い離反。光明天皇を京都に擁立します。これを北朝といいます。さらに尊氏は足利幕府も開きました。

これに対し、後醍醐天皇は京都を脱出し吉野に朝廷を開きます。これが南朝です。後醍醐天皇は北陸、九州など各地へ自らの皇子を派遣し復権への足がかりにしようとしました。

土呂幕中央に刻まれた菊池武光と少弐武藤の一騎打ち。重なり合うように刻まれた事により一層迫力が増しています。

懐良親王（かねながしんのう）は後醍醐天皇の八歳の皇子です。征西大将軍として１３３６年に九州に派遣されました。皇子を奉じた菊地武光は高良山（こうらさん）（福岡県久留米市）に城を築き征西府としました。

１３５４年、南朝の有力者北畠親房（きたばたけちかふさ）が亡くなり南朝方でのおおきな勢力はこの九州の懐良親王と菊池一族のみとなりました。

１３５９年７月筑後川を挟み南朝勢４万と北朝勢６万が激突、戦いは熾烈を極め両軍あわせ４８００人ほどが戦死したと言われています。この戦いは南朝方が勝利し九州は南朝の支配を受けることになりました。

戦いの後、傷ついた菊地武光が刀についた血糊を川で洗った場所が現在の福岡県三井郡大刀洗町（たちあらいまち）と言われています。

また、この合戦は「関ヶ原の戦い」「川中島の戦い」と並び日本三大合戦の一つに数えられています。

文と構成　若頭　坂口健一・山本創平